

東京芸術劇場シアターオペラvol.12

全国共同制作プロジェクト

モーツァルト

歌劇『ドン・ジョヴァンニ』全幕

(新演出、英語字幕付、日本語上演)

音楽とダンスと 言葉の出会いが生み出す 新たな時代のオペラ

日本のクラシックシーンを牽引する名指揮者 井上道義と、
多彩なジャンルで活躍するダンサー・演出家の森山開次。
『ドン・ジョヴァンニ』新演出に挑む二人に、
その意気込みを聞いた。

森山さんにお客さんを踊らせてほしい

——今回の企画が実現に至った経緯を教えてください。

井上 『ドン・ジョヴァンニ』を誰とやるかという時、「冒険したい」と思いついたのが森山さんでした。僕が音楽監督をしていた石川県立音楽堂の邦楽ホールでよくクリエイションをしていて、嘘のない仕事ぶりが印象的だったんです。

森山 今まで見守っていただいていた井上さんと一緒にできるのが、楽しみでなりません。僕にとっては、舞台の世界で最初に勉強したのが、音楽座ミュージカル『マドモアゼル・モーツァルト』。ドン・ジョヴァンニを踊る精霊役だったので、すごく縁を感じます。

井上 彼は、本当は踊りたいはずだと思う。でも今回の僕の役割は、彼を踊らせないこと。むしろお客さんを踊らせてほしい。アンビヴァレンツな役目です(笑)。

森山 確かに、踊らないことは僕にとって大きなチャレンジです。曲を聴いて身体に入れ、歌手の方々やオーディションで選んだ10人の女性ダンサー達と共に、作品全体を豊かに作っていきたくと思っています。

ダンスと女性を通して描く、新たなドン・ジョヴァンニ像

——演出のイメージはどのように？

森山 女性の胎内をイメージしています。胎内にドン・ジョヴァンニがいて、ドンナ・アンナとドンナ・エルヴィーラとツェルリーナが彼を取り囲んでいる。

井上 この作品の真の主役は女性3人です。女性は誰でも彼女達のような部分を持っている。女性ダンサー達は、ドン・ジョヴァンニの内面も表すだろうけれど、何よりも女性達の内面を表現してくれるでしょう。だって、それこそが、ドン・ジョヴァンニを地獄に落とすのだから。



(左)森山開次 (右)井上道義

——そうしたドラマを、男性であるお二人が作られるのも興味深いです。
森山 僕にとって、女性は永遠の謎。だからこそ興味をそそられます。女性を通して、これまでとは違うドン・ジョヴァンニ像を描き出したいですね。基本的に、僕は物事をダブルミーニングでとらえたいので、地獄落ちにしても、生きるか生まれ落ちるとか、そういうことに繋がるかもしれないとも考えています。ダンスの強みは抽象的な部分を担い、お客さんに多様な解釈の余地を与えられること。ダンスが添え物にならないよう、時にマエストロに食い下がっていきたくですね。
——歌手の皆さんも踊るかもしれないとか？

井上 そうです。オーディションをして、ちゃんと動ける人を採用しました。
森山 だから可能性が広がりますよね。いわゆるダンスというより身体表現という意味で、歌う身体も音楽に乗せて表現する身体も、チョイスとして持って、演出に臨みます。

「日本語によるオペラ」の新しい時代へ

——今回は、全編日本語上演です。

井上 イタリア語を解さない森山さんに縦横無尽に演出をしてもらうには、やはり日本語がいいだろう、と。僕は40年前から少しずつ日本語上演にチャレンジしてきました。モーツァルトもドイツ語のオペラを書いたし、今も欧州では様々な作品を母国語で上演している。もっとどンドン日本語でオペラを上演すればいいと思うんです。今は、每晚頭を悩ませながら、聴き取りやすい言葉を探しているところです。
——ロシア人のヴィタリ・ユシュマノフさん、ウクライナ人のデニス・ビシュニャさんが出演されますね。

森山 お二人とも、日本語がとても上手な方です。
井上 彼らは大変ですが、日本に海外の方がたくさん入ってきている現代ならではの表現になるでしょう。今回は、“演出を踊りの方がやる”“日本語でモーツァルトをやる”“ロシア人やウクライナ人が日本語で出演する”という3つの挑戦がある。お客さんにも一緒にこの挑戦を楽しんでほしいですね。今回だけでなく、先へ繋げることができる試みだと思います。

森山 チラシに「オペラ×ダンスの邂逅」とあるように、この機会に大いに出会い直し、マエストロから多くを学びながら、自分なりの表現をしていきたいです。

取材・文：高橋彩子(舞踊・演劇ライター)

1月26日(土)・27日(日) 14:00開演 コンサートホール 富山、熊本公演あり 詳細はP12へ

総監督・指揮：井上道義 演出・振付：森山開次

管弦楽：読売日本交響楽団 合唱：東響コーラス

ドン・ジョヴァンニ：ヴィタリ・ユシュマノフ レポレッロ：三戸大久 ドンナ・アンナ：高橋絵理
騎士長：デニス・ビシュニャ ドンナ・エルヴィーラ：鷲尾麻衣 ドン・オッターヴィオ：金山京介
ツェルリーナ：小林沙羅(1月26日出演)、藤井玲南(1月27日出演) マゼット：近藤圭
ダンサー：浅沼圭 碓井菜央 梶田留以 庄野早冴子 中村里彩
引間文佳 水谷彩乃 南帆乃佳 山本晴美 脇坂優海香



鷲尾麻衣

金山京介

小林沙羅

藤井玲南

近藤圭

©Hikaru.

東京芸術劇場 海外オーケストラシリーズ

スイス・ロマンダ管弦楽団



©Enrique Pardo

新時代を迎えたスイス・ロマンダ管弦楽団

**伝説の巨匠アンセルメが創設した名門、
新しい芸術監督ジョナサン・ノットと来日。
歴代シェフたちとは一線を画す
現代感覚に満ちた指揮者との組み合わせは？**

スイス・ロマンダ管弦楽団というオーケストラに、今の若い方はどのようなイメージをいだいているか、伺いたい気もする。というのは、私のような昔からのファンにとっては、「スイス・ロマンダ」は、創設指揮者・初代芸術監督のエルネスト・アンセルメ(1883~1969)の名と結びついて離れないからだ。そう、彼とこのオケが演奏するフランスやロシアの作品のレコードを、私たちはどんなに愛聴したことだろう！特にドビュッシーやフォーレの作品の演奏には、私はこの上なく陶醉したものだ。

このスイス・ロマンダ管弦楽団は、1968年初夏に初来日した。アンセルメは、既にその前年にシェフの地位を後任のパウル・クレツキに譲っていたが、この時はその2人そろってやって来た。優秀な録音で聴き親しんで来た、このオーケストラの明晰で瑞々しく美しい音色や、華麗かつ詩的なアンセルメの指揮をナマで聴けるとあって、私たちはホールに詰めかけたのだが、しかしそれは、——レコードで聴き慣れたこの指揮者とオケのイメージとは、かなり違うものがあった。ある意味ではそれは当然である。彼らの本拠地、素晴らしい音響で有名なジュネーブのヴィクトリア・ホールで、巧みなマイク・アレンジによる技術の粋を尽くして作られたレコードで聴く演奏と、気候も湿度も異なる東京のホールで響く実際の演奏とでは、音色も楽器のバランスも異なって聞こえるのは不思議ではない。

感性の自由な聴き手たちはそれを踏まえて彼らの演奏を愉しんだが、一方、「レコードで聴くほど優秀なオーケストラではない」とまで批評する人もいた。何かの雑誌で読んだ記憶があるのだが、その批評を耳にしたアンセルメが機嫌を損ね、「私のオーケストラの真価を知りたいなら、音のいいヴィクトリア・ホールで聴くべきだ」と言ったとか。それを聞いた批評家が、「それはおかしい。良いオケならこのホールでもいい音になるはずだ」と言ったとか、言わないとか。

変な話を蒸し返してしまっただが、外国の演奏家をレコードでのみ判断す

る風潮が未だ残っていた当時の日本の音楽界には、こんな笑えぬ出来事もあったのである。

いずれにせよ、このスイス・ロマンダ管弦楽団は、創設以来、半世紀近くにわたって「アンセルメの楽隊」そのものであった。そのイメージはあまりに強烈だったので、その後、いかなる優れた芸術監督が登場しても、昔からの聴き手にとっては、その「過去の偉大な影」を振り払うのが至難の業であったことは事実である。

●
クレツキのあと、芸術監督のポストは、ヴォルフガング・サヴァリッシュ、ホルスト・シュタイン、アルミン・ジョルダン、ファビオ・ルイーダ、ピンカス・スタインバーク、マレク・ヤノフスキ、ネーメ・ヤルヴィ——と受け継がれて来た。私が日本で聴いた範囲での印象では、サヴァリッシュとの公演(1976年)の際にはあまり面白くなく、アルミン・ジョルダン(1987年、91年、95年)の指揮では壮麗さが復活していてそれなりの演奏、ルイーダ(1999年)の時には色彩豊かなローカル色が確立されていて良かったという記憶がある。直近では、山田和樹が首席客演指揮者として同行来日した公演(2014年7月)があったが、この時は何となくヤマカズの引き立て役といった感があって——。

そこでいよいよ今回は、新しい芸術監督ジョナサン・ノットとのコンビでの初めての来日である。ノットは今、東京交響楽団の音楽監督として、意欲的なレパートリーの開拓と密度の濃い演奏で、特に若い聴衆には絶大な人気を得ている存在だ。スイス・ロマンダは、彼のシャープな感性と、どのような融合を示すことだろうか？アンセルメ時代のことはもういい。それを知らない若い聴き手たちは、きっとこだわりなく今のスイス・ロマンダを愉しむだろう。

文：東条碩夫(音楽評論)

4月13日(土) 詳細はHPへ
14:00開演 コンサートホール

指揮：ジョナサン・ノット
ヴァイオリン：辻彩奈
管弦楽：スイス・ロマンダ管弦楽団
曲目：メンデルスゾーン/
ヴァイオリン協奏曲 木短調
マーラー／交響曲第6番



ジョナサン・ノット

辻彩奈

©Enrique Pardo

©Warner Classics